

2008年10月25日・26日

茅刈り講習会・コンテスト資料

森林塾青水

## 草はすごい

私たちが、ここ群馬県みなかみ町藤原の上ノ原にあるススキ草原にかかわろうと思ったきっかけは、「美しいススキ草原を守りたい」という単純な理由からでした。でも、かかわりを続けるうちに、ススキ草原には私たちのイメージを越える大きな意味と可能性があることを知りました。「ススキを刈る」ということも、それが単なる草刈りではなく、草原を守るためには大切な人の営みであること、刈り取られたススキにも大きな価値があることを知りました。

### 1. 草原は生物多様性の宝庫

日本にも草原が広がっていた時代がありました。最近でいえば、氷期と呼ばれる寒冷な時代です。ゾウ、シカ、ウマなど、草食のほ乳類がたくさん群れていました。大陸とも陸続きだったので、ニッコウキスゲ、オキナグサ、マツムシソウ、ヒゴタイ、キスミシ、ウメバチソウなどの植物や、ヒョウモンチョウ類などが大陸から渡ってきました。

日本の気候が暖かくなって「森の国」になってからも、草原性の昆虫や植物は、各地に残る草原で生き続けてきました。川の氾濫などによって保たれる「自然草原」だけでなく、人が火入れなどをして作り上げた「二次草原」も、そうした生き物たちの暮らしの場となってきました。

しかし、草原はどんどん減少しています。ある統計によると、明治時代には国土の3割が草原的な場所だったといえます。それが現在は1パーセントしかありません。草原の減少（理由はさまざまです）にともなって、草原性の生き物たちも危機におちいっています。キキョウやオミナエシなど、かつて身近に親しまれてきたものさえ、暮らしの場を失っているのです。絶滅が危惧される植物の7割は草原性とも言われています。

70年代の群馬県の調査によると、群馬県で見られる蝶・蛾の中間の3分の2が、今回茅刈りをする上ノ原で確認されています。上ノ原は、たった11ヘクタールの草原ですが、これを維持することは、生き物の多様性にとって大きな意味をもっているのです。

### 2. 樹木以上に大きなバイオマス

ススキは、刈っても刈っても毎年生えてくるすごい植物です。どれくらいの量が生えてくるか、いちど調べてみました。合計10平方メートルのススキを刈り取って乾燥し、重さを量ったところ、約7・4キロありました。上ノ原の草原部分は約10ヘクタールなので、全体では毎年74トンの「バイオマス」が生産されることとなります。1年間に固定される炭素に換算して、樹木のアカマツよりも大きいという報告もあります。

毎年繰り返して生み出されるススキバイオマス。利用しない手はありません。

### 3. 草の利用 さまざまな可能性

それではどんな利用方法、可能性があるのでしょうか。下にまとめてみました。これ以外にも考えられると思いますので、みんなで考え、実践につなげたいものです。

- ① 全国的に不足する「茅葺き」の素材として
- ② 建築物の断熱材として
- ③ 安全で高品質の野菜・果物の有機肥料として
- ④ 環境負荷のない野菜・果物栽培のマルチ材として
- ⑤ エネルギー源として
- ⑥ 刈り取って持ち出し、長期間使うことによる炭素固定の役割
- ⑦ 場としての利用…環境学習や楽しみ・癒しの場として
- ⑧ 場としての利用…草原性の生き物たちの暮らしの場として

### 4. それではどう守るのか

「野焼き」「放牧」「刈り取り」を、草原を維持するための「3大技術」といいます。

野焼きは火によって樹木の侵入をさまたげる、荒っ払いけれどもっとも手っ取り早くて確実な方法です。ただ、過度の野焼きは地力を劣化させ、ススキさえ生えない場所になるおそれもあります。

放牧は、牛、ウマ、羊などの草食動物の「舌」で刈り取りをおこない、草原を維持する方法です。これも過放牧はいけません。

刈り取りは、人の手によって草を刈り、持ち出して利用する方法です。有機物を持ち出すことで、その土地が富栄養化になることをおさえ、森林に移行することを押しとどめます。

上ノ原では、「野焼き」と、今回の「刈り取り」を組み合わせるとススキ草原を維持していくことにしています。

だれが守るのか、ということも重要です。

上ノ原はかつて、地元（群馬県みなかみ町藤原地区）の人たちの茅場（入会地）でした。屋根の材料や馬の飼料などのために利用することで、ススキ草原が保たれてきましたが、今は地元だけでは守れません。新しい仕組み、新しい利用、新しい管理が必要です。それは、流域の「市民」のかかわりです。今回の茅刈りもその試みのひとつですが、どんな方法があるか、みんなで考えていきたいと思います。

\*\*\*

刈っても刈っても草が生えてくるのが日本の風土です。

生活の場所を守るために草を刈る。作物を守るために農地の草を刈る。農地を守るために山すその草を刈る。農地を肥やす肥料のために草を刈る。木を育てるために草を刈る。牛を育てるために草を刈る。そして、草を使うために草を刈る。

日本人は草を刈る民族です。日本には草刈りの文化がありました。草を刈ることで生まれた文化がありました。21世紀、新しい草刈りの文化が生まれる予感がします。

## 上の原の歴史

所在地：群馬県水上町藤原／面積：219町6反4畝9分

- 1883（明治6） 官有地へ編入。入会地としての利用は昔どおり
- 1921（大正10） 水上村（当時）に15,028円で払い下げ
- 1927（昭和2）～1932年（昭和7）  
カラマツの植林始まる（県行造林）。6年間で78ヘクタール
- 1943（昭和18）頃 義勇軍によるジャガイモ、カライモ（キクイモ）栽培など
- 1945（昭和20）～ 食糧難時代。カヤバの一部をカンノ（焼き畑）に
- 1947（昭和22）頃 学校林としてカラマツ植林。火防線（4m巾の防火帯）作られる  
※ 火防線づくりは、学校の年中行事だった。町有林を守るため学校へ要請があり、小学校の3年からやった。「火防線切り」といって、地面の土が出るまで掘り起こした（林親男さん）
- 1950（昭和25）頃～1965（昭和40）  
入山者に山菜採取の「入山証・青物採取券」（30円～100円）を発行
- 1959（昭和34） カラマツ林、台風15号（伊勢湾台風）で大被害。被害木約1,500石（420m<sup>3</sup>）を206万500円で売却
- 1960（昭和35）頃 藤原地区最後の屋根替え（カヤの伝統的入会利用が消滅する）
- 1965（昭和40）頃 最後の野焼き
- 1965（昭和40） 大部分をコクドへ売却。21ヘクタールが残る  
※ 土地は多くの「筆」に分かれていた。220ヘクタールのうち、権利の65%を宝川温泉の小野氏が持っていた。残り35%が土地の者の権利だった
- 1980（昭和55）頃 シラカバなどの侵入が始まる（森林塾青水「森林化調査」より）
- 1980（昭和55） 水上高原ゴルフ場オープン
- 1990年（平成2）頃 町田工業による部分的なカヤ刈り始まる
- 1996（平成8） 5月に失火。2ha。入山者のバーベキューの火が原因
- 2003（平成15） 上の原の町有地21ヘクタール、水上町と森林塾青水が賃貸契約。
- 2004（平成16） 40年ぶりの野焼き。「講座・森林 commons 村・ふじわら」開催
- 2008（平成20） 茅刈り講習会、コンテスト開催
- 2009（平成21） 日・中・韓環境ジャーナリスト・NGO 交流シンポジウム開催  
—暮らしの現場から自然との共生を考える—

## 上ノ原の植物資源と利用

上ノ原にはススキだけでなく、いろいろな草が生えていた。野焼きがおこなわれていたので、火に強いハギやワラビがよく生えた。そうしたススキ以外の植物は、現金収入になったり家畜の飼料になったり、暮らしのなかでさまざまに利用されていた。オキナグサやキキョウなど、今はまだ未確認の草原の植物も、上ノ原には咲いていた。

資源の種類		用途	規制／採取時期／その他
カヤ	ススキ	屋根替え	〇明け／10月末（8月の組長寄合で決定）、地区総出で刈った。火入れは4月、雪の間を焼いた
カヤ	ススキ	炭俵、養蚕のカヤマブシ、家屋の冬垣	屋根葺き用の後／10月末～11月
カッチキ （刈敷）	青草	水田の刈り敷き（春の田植え前の水田に敷き入れる）	規制なし
カッポシ （干草）	青草	馬の飼料。馬屋に敷き込んで堆肥	規制なし／梅雨が明けるまでに
ハギ	萩	保管して葉を馬の飼料に。茎は串柿の棒、炭俵のふたなどに利用	ハギの〇明け／ハギの花が終わり、実が入り過ぎない時期
クソバ （クソバ採り）	葛の葉	馬、ウサギ、ヤギの飼料。蔓は2つに裂いて紐に	〇明け／10月10日
カズラの根 （カズラ掘り）	葛の根	でんぷん採取	規制なし／秋～翌春
山菜類		ワラビ、ゼンマイ、フキ、ウドなど	規制なし／春
ワラビの根	蕨	蕨粉。機織りや番傘の糊の原料として桐生などへ。各家で調製、上澄みの黒い部分は焼き餅に	規制なし／秋～翌春／重要な現金収入源

以 上